

眼差しの写真 一町を歩いて見つけた場所とその観察によって考えられる建築のあり方 町の中に埋もれた840mの道の中に点在する、見ようしないと思えてこないものに眼差しを向ける。そしてそれらの魅力を顕在化させ、アクセシビリティを獲得し、その場所がどのように使われれば、市民の為の公共空間として最大限活用されるのかを考え、840mの公民館の計画を行う。

01. 目的 二生活に寄り添った公共空間をめざして

その場所に今あるものや増えた生活を観察して、新しいものを作っていくことだけが、果たしてそこに住む人々の生活を豊かにすることなのだろうか。その町を丹念に見て回って、観察者としての視点と最終まで持ちながら設計を行えば、人々の生活に寄り添った、豊かな公共空間が考えられるのではないかと。

そしてそれは「ハコモノ」の施設を建て、「地域活性化のための公共空間です」というようなトップダウン的な方法ではなく、またその地域の歴史でツナグキな建物や素材を適切に活用するような方法でもない新しい地域再生の手がかりになるのではないかと。

その建築はそこに住んでいる人々にも気づかれなかった、または忘れられてしまったその場所の空間価値を抽出し、既にそこにも在るものたちと生活をつなぎ、豊かな場所へと変質していく。



02. 町の観察 一町を歩いた風景の中で気づき

敷地は都府県界の住宅地。伝統的な建築でも、いかにと絶倫的な風景でもなく、結果として現代のどこにもある日常のあふれた風景。一歩ずつと観察に気づかぬ。もしもしたらその風景も、見向きもされないような場所かもしれないけれど、そうした場所にも人は生活を構えて生活している。しかし、そのような場所でもじっくり歩いてじっくり観察をし、気づいたことをスケッチし、並べて地図を作成してみると、その町にしかない風景があり、その風景を作るその町にしかないものたちが気にかかれる。それらは本来この場所や、ここで生活する人にとって豊かな暮らしを形づくる要素なのではないかと。



(注) 観察の精度をより高くするスケッチ

敷地を観察する際に、ただ見たに似た場所を写し撮って写すのではなく、膝みそ手を動かしてスケッチをかくことで精密な観察を行う。すると、普段は気がつかない、見ようしないと思えてこない魅力的な要素が浮き上がってくる。これらのものたちは、単なるフィールドワークや google earth のストリートビューでは見えないこの場所の要素である。



03-a. 型 一貫空間の顕在化と 840m の公民館再計画



<p>□ 数年前以内に建て替えが予想される「倉賀野公民館」</p>		
<p>【概要】 総床面積 3階建 延床面積 788㎡ 完成年度 1980年(2014年)</p>	<p>1室/居住人数 10〜12/20人 実住戸数 20人 開発費 25人 公費 20人</p>	<p>倉賀野公民館の定例利用サークルは約35団体(大勢舞、民謡、合唱、音楽、日本舞踊)で、メンバーの年齢は小学生から高齢者まで。2015年には若い人々によるサークルが新たに3団体(パソコン、料理、ダンス)増えたと、若年層の利用は徐々に増加している。</p>

観察を続けていく中で、周りの生活が切り離された、所有の曖昧な期間のような場所が見つかった。それはまちを顕在化している840mの道で、かつて水漏れがあったが、この道沿いに立つ住宅は皆南向きで合っている。もしも未来、暮らしのあり方にあったこの公民館の中間にある施設こそ、住民たちの憩いの場となる可能性を秘めているはずで、この場所は今まで埋もれてきた生活に寄り添った公共空間が提案できるのではないだろうか。

そこで、市民の為の公民館と、この道が持つポテンシャルが合致すると考え、840mの道沿いに建ち数年以上に亘り建て替えが予想される「倉賀野公民館」の機能を顕在させ、この道全体を1つの公民館としてリノベーションを行う。

■ 敷地 群馬高崎市倉賀野町の住宅地を縦断する 840m の道



04. 設計 この道全体を公民館として計画する7つの大きさや条件と、選みつける4つの場所の概念的な操作。

探検した要素の中から場所として可能性を感じるものを特定し、それぞれの場所にあった条件を加えていった。

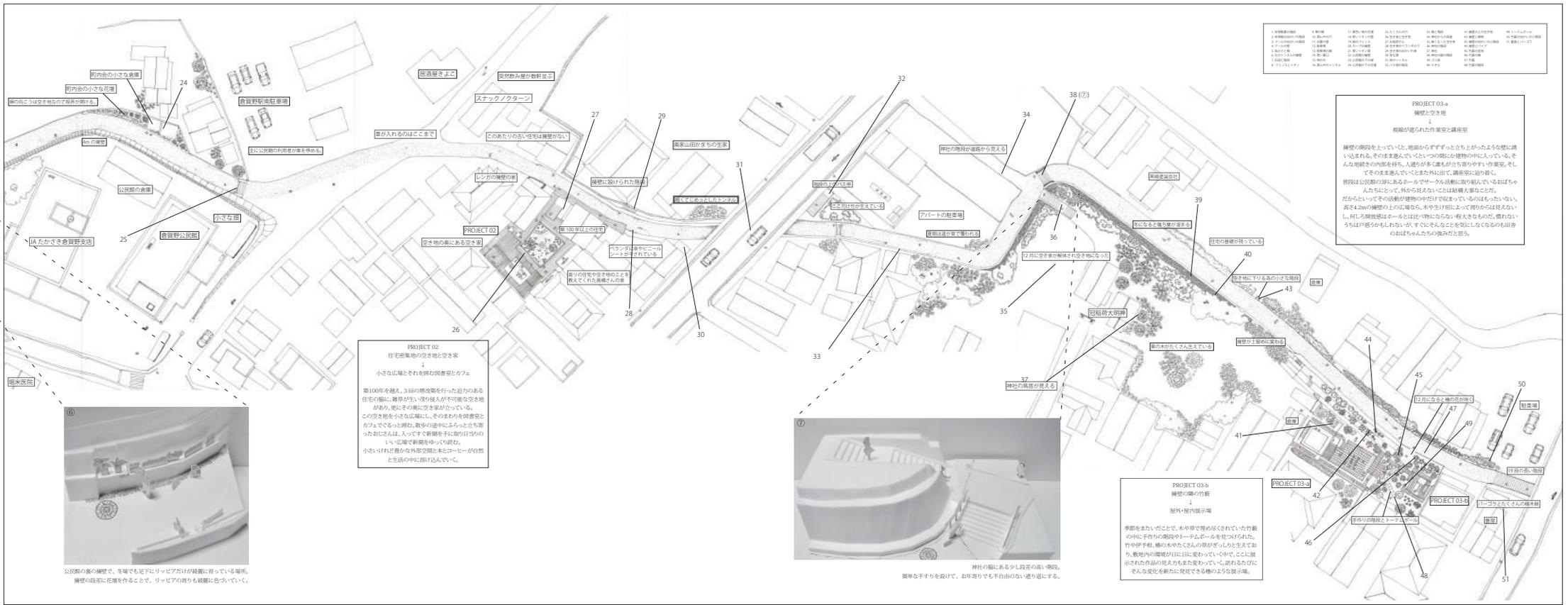
- 7つの部分の設計 (①-⑦)
- 7つの部分の設計によって、その場所の持つ魅力的な要素を顕在化し、空間として提供する。そうして道に属する領域を併せやしていく。
- 4つの建築の設計 (PROJECT 01-PROJECT 03b)
- 価値を失ってしまった地にどのような場所に建築を設計し、その場所にある要素を建築によって結びつけることで顕在化していく。これらの建築によって、840mの道に散在する空間に公民館の機能がだんだんと溢れていく。

設計で考えたことは、選定した要素の顕在化。つまり選定した要素へのアクセスを可能にし、この場所がどういふ使われ方をすれば、市民の為の公共空間として最大限活用されるのかということである。そのようなことで場所の再編と公民館の再編を同時に行う。アクセスが開かれたり、その場所が新たな使われ方をすることによって、今まででは違う見方や空間の感じ方に気づくことができ、既存のものに対して新鮮な眼差しを向けることになる。

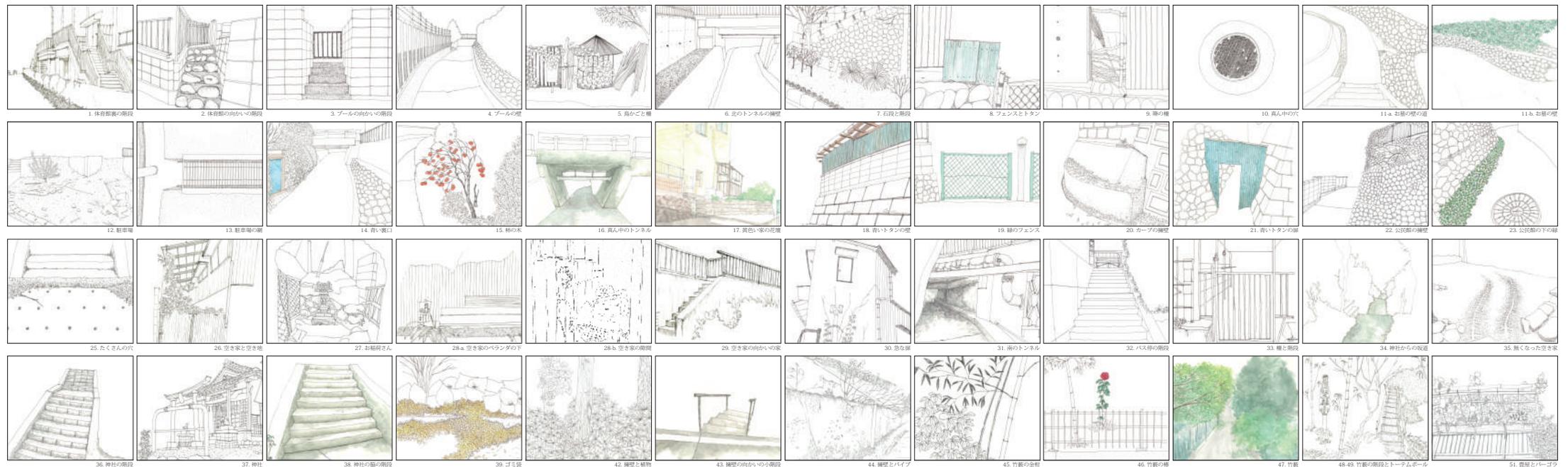
05. 展望

この道を行く要素たちに新鮮な眼差しが向けられることで、既存のものたちの新たな間取りが生まれる。再び価値を取り戻したものは、空間として人々に提供され、この道を歩いていく中で連続的に発見される空間が、町の新なる表情をつくると。そのような中で、かつての水路が小学校への遊路として、朝のウォーキングのコースとして、お年寄りの散歩道として、部活のトレーニングの場所として使われ、そして今まで背を向けていた建物たちがこころを向ける。

例えば裏口を表の玄関にしたり、そろばん塾が入り口を作り看板を立てたり、晴れ間には小さな階段がついたり、洗濯物を干すベランダが、人が集まるバルコニーになり、雑多な花壇に花が植えられ、人々の生活が840mの道に接し、この道が生活のすぐそばにある公民館として徐々に公共性を帯びていく。既にここにあったものたちによって生まれる、これらでここにかかった空間は、この場所のできり立たい、いきいきとした町の風景になり、ここから生まれた関係が、水漏れのように町全体に広がっていく。



03-b. 対象敷地の選定 840mの道の中で雑壁を失ってしまっている要素を採集し、対象敷地を選定する。

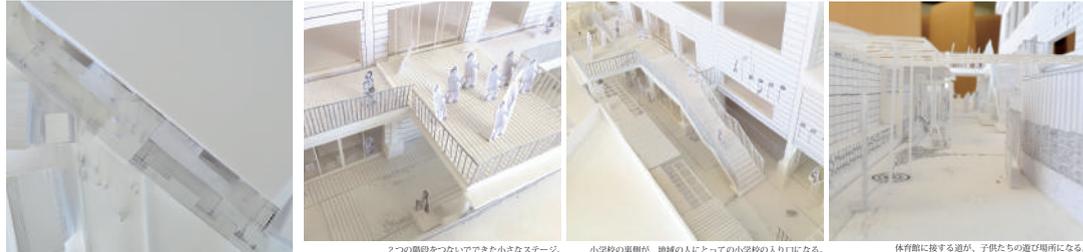


PROJECT 01
 体育館裏の階段
 ↓
 学童クラブと小さな保育室

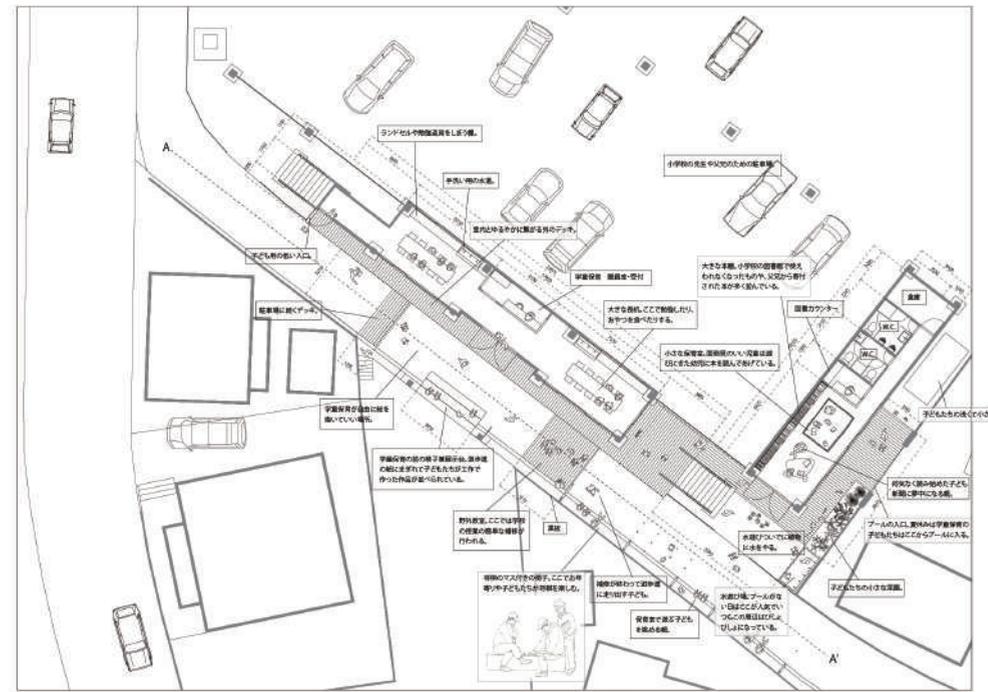
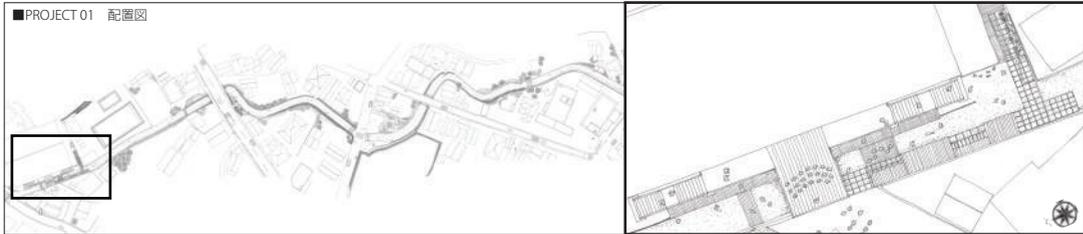
小学校の体育館の裏に、誰にも使われていない2つの大きな階段がある。2つの階段をつなげて、体育館の中で起きていることが少し溢れてくるようなステージを作り、その下の空間に学童保育と小さな保育室を取ける。学童保育の子供たちは歩行者しか通らない840mの道で思い切り遊び、面白い。子供は保育室で小さな子供と一緒に本を読んでも遊ぶ。それまでは人気の無かった小学校の裏側が地域住民にとっての小学校の入り口となる。



長い間使われていない体育館の裏の階段。 体育館下のピロティ空間は駐車場として使われている。 階段を上ると体育館の裏口がある。



2つの階段をつないでできた小さなステージ。 小学校の裏側が、地域の人にとっての小学校の入り口になる。 体育館に接する道が、子供たちの遊び場所になる。



眼差しの写真 一歩を歩いて見つけた場所とその組織によって考えられる建築のあり方 体育館裏 1階平面図 (GL+1500mm) S=1:150

PROJECT 02
 住宅密集地の空き地と空き家
 ↓
 小さな広場とそれを囲む同居室とカフェ

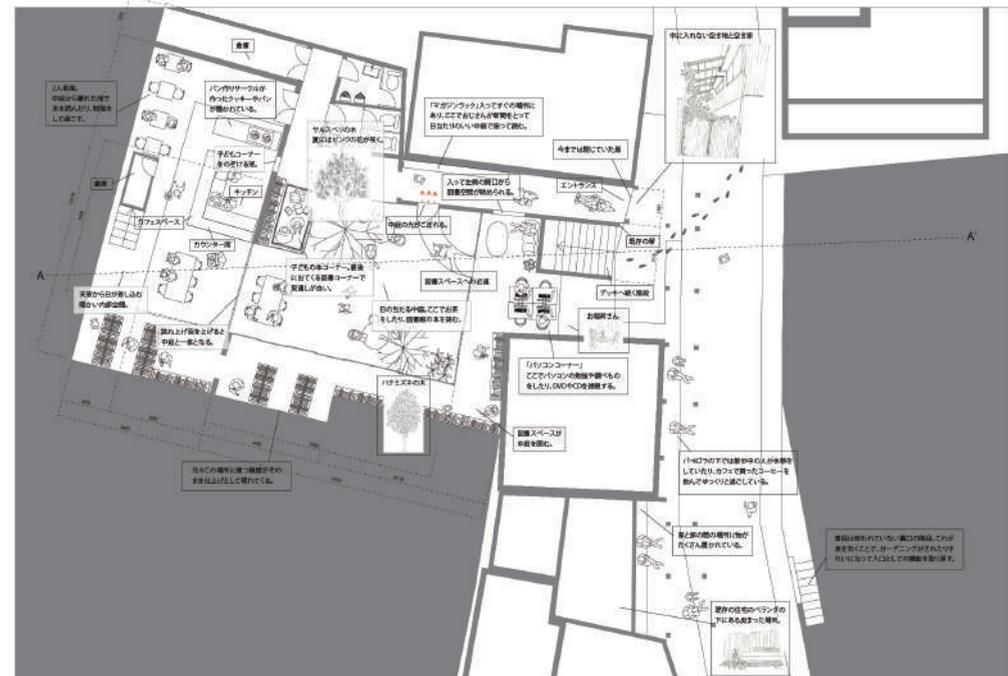
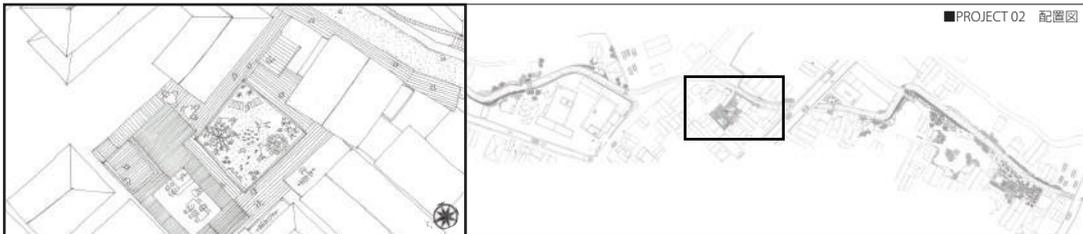
築100年を越え、3回の増改築を行った迫力の住宅の脇に、雑草が生い茂り侵入が不可能な空き地があり、更にその奥に空き家が生きている。この空き地を小さな広場に、そのまわりを同居室とカフェでぐるりと囲む。散歩の途中ふらりと立ち寄ったおじさんは、入ってすぐ新聞を手取り日当たりのいい広場で新聞をゆっくり読む。小さいけれど豊かな外部空間と木とコーシーが自然と生活の中に溶け込んでいく。



3度の地震を行った築100年を越える住宅。 地盤によって作られたベランダ。 草が生い茂り、侵入の不可能な空き地と奥の空き家。



既存の住宅の隙間を縫うようにバルコニーが外まで伸びる。 屋根に大きな開口を設けて、1階のカフェに溢れ光を落とす。 中庭に接するベランダがつながり、大きなバルコニーになる。



眼差しの写真 一歩を歩いて見つけた場所とその組織によって考えられる建築のあり方 住宅密集地 1階平面図 (GL+2000mm) S=1:100

PROJECT 03-a

擁壁と空き地
↓
視線が遮られた作業室と講座室

擁壁の階段を上っていくと、地面からずっと立ち上がったような壁に誘い込まれる。地続きの内部を持ち、人通りが多く賑わい立ち寄りやすい作業室。そしてそのまま進んでいくとまた外に出て、講座室に辿り着く。階段は公民館の3Fにあるホールでサークル活動に取り組んでいるおばちゃんたちにとって、外から見えないことは結構大事なことがある。慣れないうちは戸惑うかもしれないが、すぐにそんなことを気にしなくなるのも田舎のおばちゃんたちの強みだと思う。



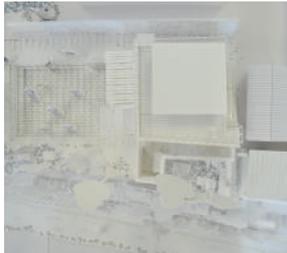
擁壁上の植物が道に向かって生えている。



高さ4.2mの擁壁によって上の空き地は閉ざされている。



周りの家の影と植物に囲まれた、風にも使われぬ空き地。



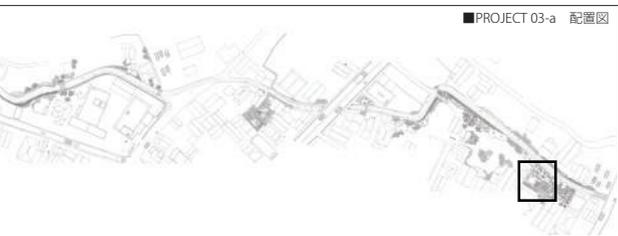
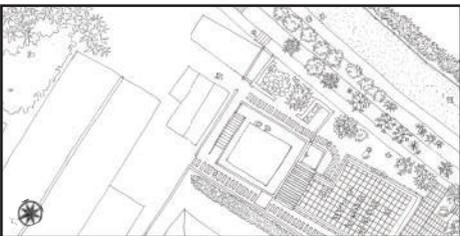
擁壁を上ると、地面から立ち上がったような壁に誘い込まれる。



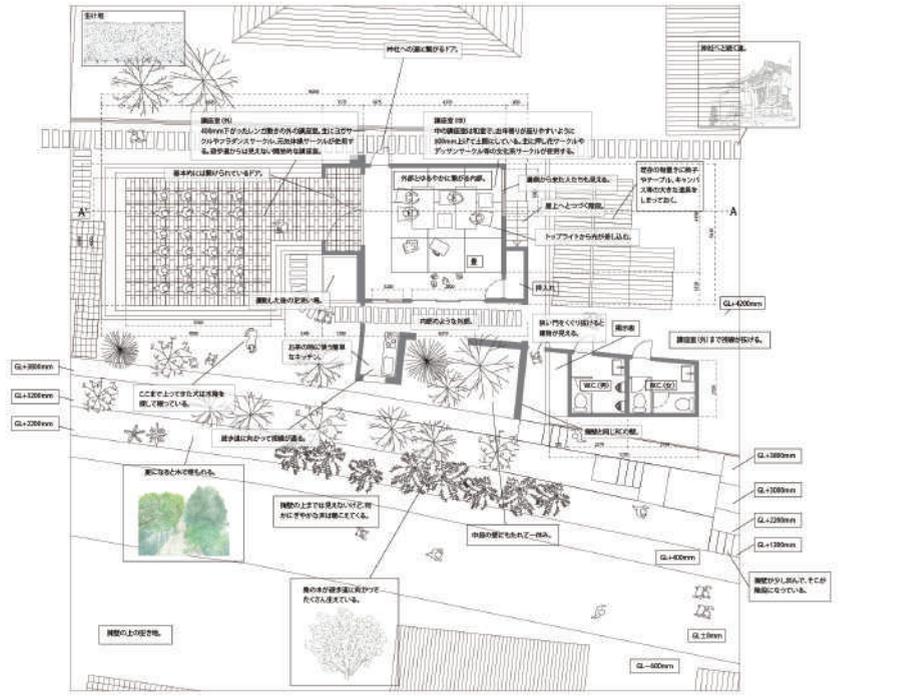
木をよけて登りが立ち、そこが内部と連続した小さな中庭になる。



地面との連続感を持ち、立ち寄りやすい作業室と外の講座室。



PROJECT 03-a 配置図



眼差しの写真 一歩を歩いて見つけた場所とその視線によって考えられる建物のあり方 擁壁上の空き地 1階平面図 (GL + 5700mm) S=1:100

PROJECT 03-b

擁壁の隣の竹藪
↓
屋外・屋内展示場

季節をまたいでここで、木や草で埋め尽くされた竹藪の中に手作りの階段やトームボールを見つけた。竹や伊予柑、柿の木やたけのこの草がざっしりと生えており、敷地内の環境が日に日に変わっていく中で、ここに展示された作品の見え方もまた変わっていく。訪れるたびにそんな変化を新たに発見できる橋のような展示場。



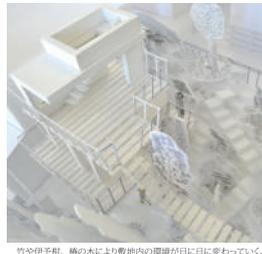
1年の半分は植物によって竹藪の中は見えなかった。



手作りの階段とトームボールが冬になって見つけられた。



竹藪の中の階段を上ると、住宅につながる狭い道がある。



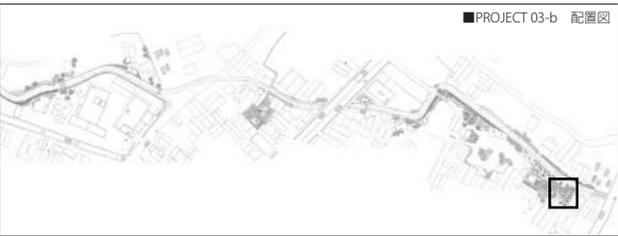
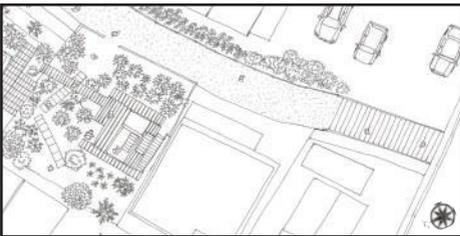
竹や伊予柑、柿の木により敷地内の環境が日に日に変わっていく。



最上層からは隣の擁壁の上にいる人たちが一望できる。



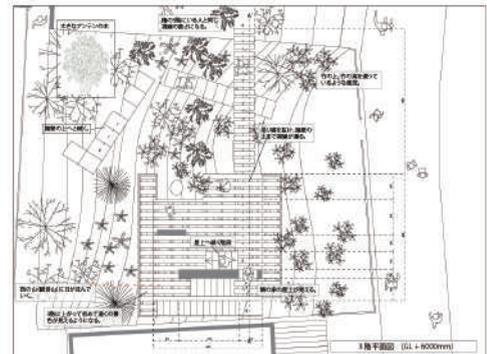
この展示場は植物にまぎれてひっそりと佇んでいる。



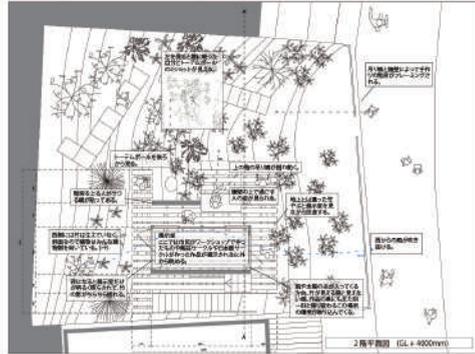
PROJECT 03-b 配置図



1階平面図 (GL + 3400mm)



1階平面図 (GL + 8000mm)



2階平面図 (GL + 4000mm)



最上階平面図 (GL + 9000mm)

眼差しの写真 一歩を歩いて見つけた場所とその視線によって考えられる建物のあり方 竹藪 平面図 S=1:100